



(文化財愛護シンボルマーク)

国見町発掘調査速報（第2号）2003.08

国見中部地区（土黒地区）^{ほじょう} 圃場整備関連

文化財愛護シンボルマーク

このシンボルマークは、ひろげた両方の手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱(組みもの)のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

いしはらいせき やふさいせき はっくつちょうさ 石原遺跡・矢房遺跡の発掘調査



やふさ 矢房遺跡古墳時代住居跡出土品より

『およそ1,500年前に使われていた土器』

2000年～2003年の調査結果

長崎県国見町教育委員会

☆☆☆ 発刊に当たって ☆☆☆

- 本冊子は国見町土黒所在の石原遺跡・矢房遺跡に関する簡易な解説を目的としています。
- 内容は平成10年度から行っている圃場整備事業に伴う石原遺跡・矢房遺跡発掘調査の成果です。
- 本冊子に関する問い合わせは国見町教育委員会までお願いします。

石原遺跡・矢房遺跡発掘の理由

くにみちょう ひやっかだいいせき じゅうぞのいせき いがい
☆国見町には百花台遺跡や十園遺跡以外にもたくさんのお跡があります。「遺跡」とは、私達の祖先
せんくとうじ じゅうきょあと せいかつようぐ どき せつしき はっけん ばしょ わたしたち そ
先が暮らしていた当時の、住居跡や生活用具(土器や石器)などが発見される場所、すなわち「私
たちそせんくこんせきのこばしょ いせき はっけん どき わたしたち そせんれきし
達の祖先の暮らしの痕跡が残されている場所」のことです。この「遺跡」から発見された「土器・
せつきじゅきょあと わたしたち そせんれきし げんざいいわたしたち そせんれきし
石器・住居跡」などは、私達の祖先の歴史そのもので、ひいては現在生きている私たちの歴史で
あります。発掘調査を行うと、私達がどのような歴史をたどって現代まで生き抜いてきたか
わかります。このような「遺跡」は大切な歴史遺産であり、私達みんなの財産といえるでしょう。

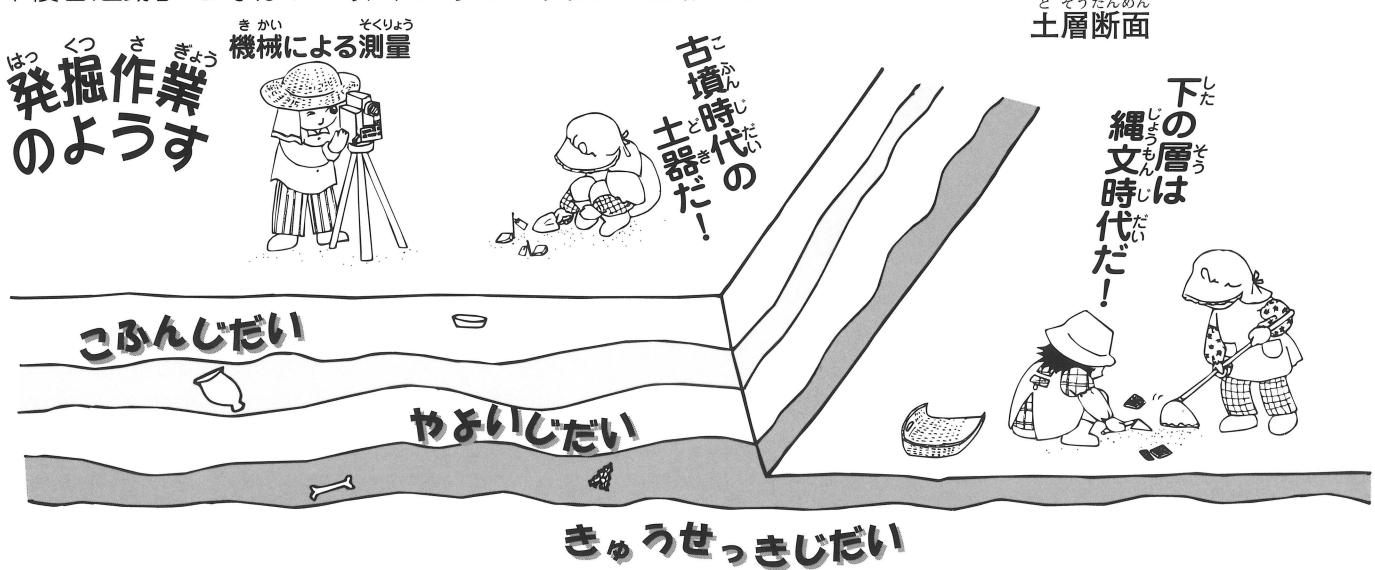
くにみちょう いせき そんざい ばしょ こうじ さぎょう おこな こんかい いしはら いせき やふさ
国見町では「遺跡」が存在する場所で、しばしば工事作業が行われます。今回の石原遺跡・矢房
いせき ちょうさ ほじゅせいび じぎょう こうじ いせき いちぶ しょうめつ ぶぶん
遺跡の調査は、圃場整備事業の工事によって遺跡の一部が消滅してしまうために、その部分の
ちょうさ おこな わたしたち ざいさん いせき ないよう きろく どき せつしき はっくつ
調査を行って、私達の財産である「遺跡」の内容を記録するため、土器や石器などを発掘しました。

発掘調査の基本

みぎしゃしん いせき どそうだんめん いろちが つちなん
右の写真は、遺跡の土層断面です。色の違う土が何
まいかさ わか つち いろちが つち
枚も重なっているのが判ります。土の色の違いは、土
たいせき じだい か はっくつ いろちが
が堆積した時代によって変わり、発掘はこの色の違う
どそう ちうさ おこな どそう した
土層ごとに調査を行います。この土層は、下のものほど
ふるうえ どそう あたり とくちょう
古く、上の土層になるにつれ新しくなる特徴があります。
かくどそう ふく どき せつしき じゅう
したがって、各土層に含まれる土器・石器・住
きよあと じだい しんきゅうかんけい どそう かさ み いちもく
居跡の時代の新旧関係も、土層の重なりを見れば一目
りょうぜん いしはら いせき やふさ いせき きゅう
瞭然というわけです。石原遺跡・矢房遺跡では、旧
せつしき じだい ちゅうせい まい どそう かくにん
石器時代～中世までの9枚もの土層が確認されました。
おおじだい かさ はっけん いせき
このように多くの時代が重なって発見される遺跡は
ふくごう いせき よ ひじょう めずら きちょう いせき
「複合遺跡」と呼ばれ、非常に珍しく貴重な遺跡です。



どそうだんめん
土層断面



旧石器時代のくらし

紀元前10,000年 紀元前300年 250年 710年 1,192年 1,600年

旧石器

縄文

弥生

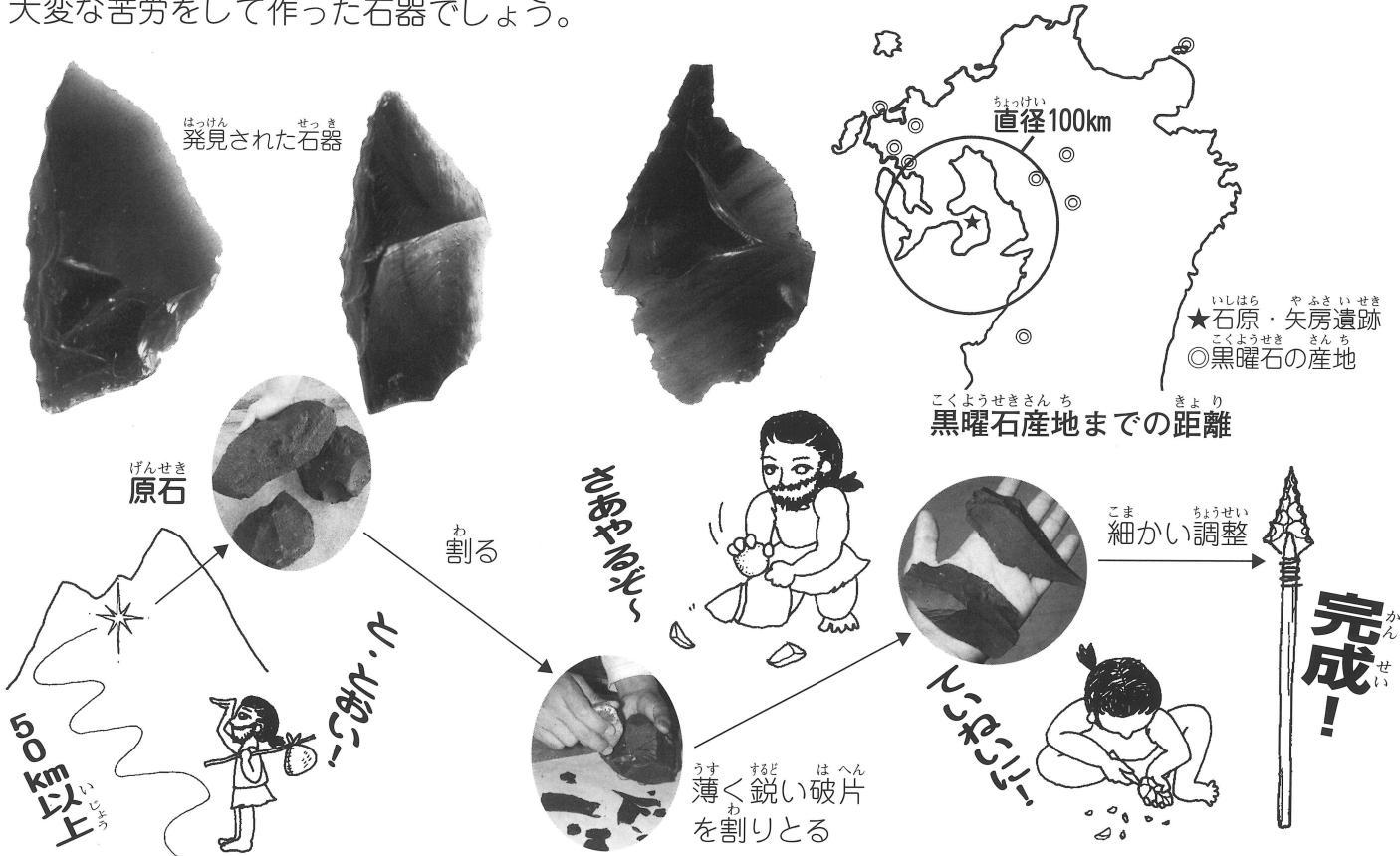
古墳

奈良・平安

中世

近世

したしゃしん はっけん なが せつき やく ねんまえ つく こくようせき
下の写真は、発見された長さ5cmほどの石器で、約20,000年前に作られたものです。黒曜石と
よ 呼ばれるガラス質の石で作られており、ナイフや槍先として使用されたと考えられます。この黒
曜石は島原半島には存在せず、長崎県松浦市や佐賀県伊万里市などの黒曜石産地から運ばれたも
のです。直線距離で50km以上はなれた場所で、徒歩しか移動手段のなかった旧石器人にとっては、
大変な苦労をして作った石器でしょう。



黒曜石はごく一部の地域で取れる石。
黒曜石を求めてはるかかなたへ。

やっとの思いで手にした
黒曜石、大事に使います。

ちいさな石や鹿の角で最後の
調整。・・・そして完成!!



しめしめ
エモノだ!!
狩り
美味!!
しばらく滞在
次どこいこか~
次の場所へ
旧石器人たちは食料である動物を追い求め、移動しながら生活していました。今回発見された旧
石器時代の遺跡(生活跡)は、彼らが一時的に滞在した数少ない「場所」です。当時は現代に比べ
るとはるかに人口も少なく、彼らの生活の痕跡は非常に少ないはずです。この様な旧石器時代の遺
跡の発見は、珍しくかつ貴重なものです。これまでの調査で、国見町では旧石器時代の遺跡が他の
地域に比べ数多く見つかっています。このことは旧石器人たちにとって、国見町が非常に暮らしや
すい環境であったことを物語っています。国見町の住みやすさはご先祖様のお墨付きのようですね。

縄文時代のくらし

紀元前10,000年 紀元前300年 250年 710年 1,192年 1,600年

旧石器

縄文

弥生

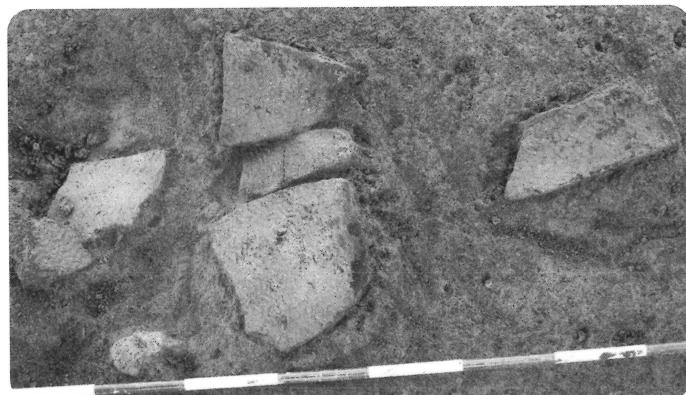
古墳

奈良・平安

中世

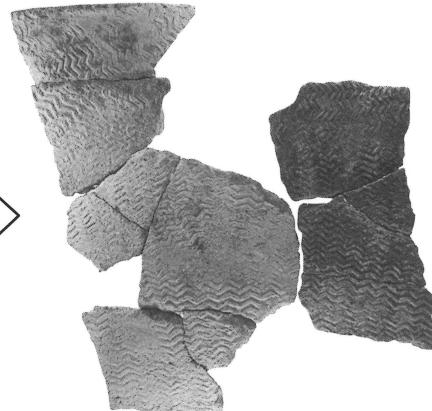
近世

石原遺跡・矢房遺跡からは、約8,000年前（縄文時代早期）の土器や石器が多く出土しています。写真は発見された土器です。発掘調査で出土するこの時代の土器は、ほとんどが割れてしまつて、バラバラの状態で発見されるものばかりです。また、接合作業を行っても完全な形に復元されることは非常にまれです。8,000年という時の流れの中で古代人の歴史の大部分が失われてしまっています。したがって、どんなに小さな土器片・石器でも貴重な資料であり、見逃すことは出来ません。小さな土器片からも時代や当時の生活がわかるからです。

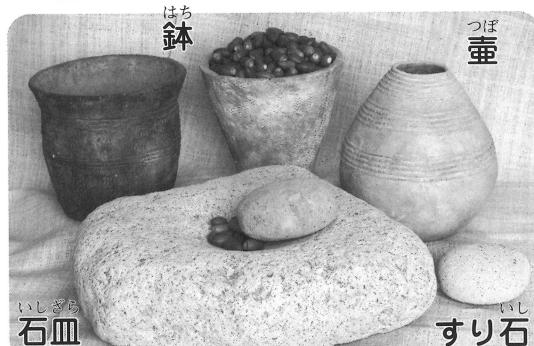


発見直後の縄文土器

接合してみると

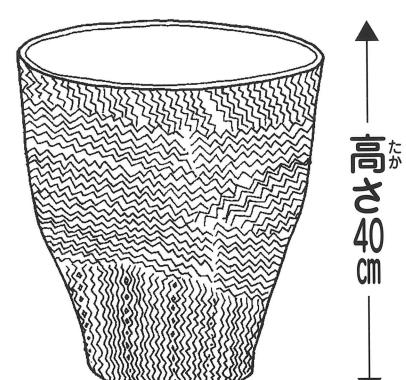


完全な形には復元できない



縄文時代の台所用品(調理具:土器は復元品)

※石皿・すり石はドングリなどをすりつぶす道具



(上の写真の土器本当はこんな形)

《豆知識》縄文土器の文様

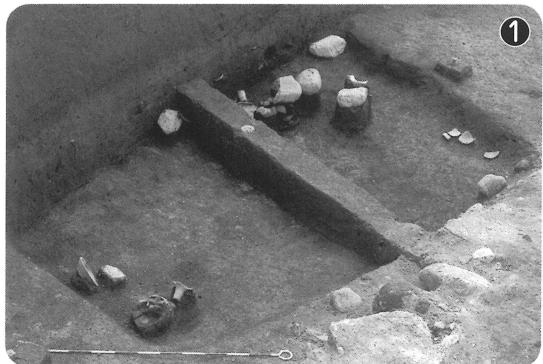
縄文土器といえば、「縄」を使って文様を付けている】と思われるがちですが、九州では「縄」以外の文様のほうがむしろ主流です。貝殻や木の棒に文様を掘り込んだものを押し当てたり、指の爪なども使って多彩な文様をつけています。右の写真は「貝殻」と「木の棒」による文様の復元です。発掘で出てくる土器には驚くほど精巧な文様がつけられており、縄文人の美的感覚にはいつも驚かされます。皆さんも実物を見に発掘現場へ足を運んで見ませんか。



山形文

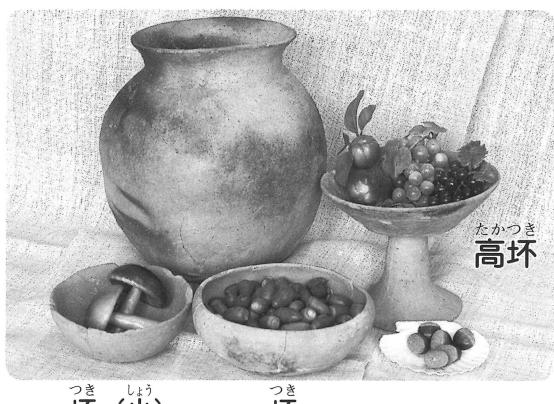
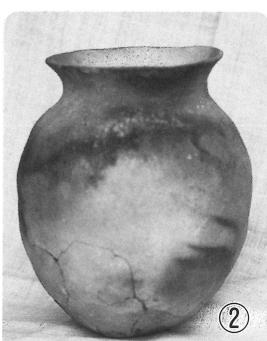
粘土
貝殻文

やふさいせき こふんじだいじゆうきょあと
矢房遺跡の古墳時代住居跡



①矢房遺跡住居跡の発見状況 ②住居跡の土器・石器出土状況
③住居跡から出土した土器（甕、壺、高壺、壺などさまざま）

矢房遺跡では古墳時代（約1,500年前）の住居跡が発見されました。その床面から多量の土器片が出土しました。（①・②）住居跡から出土した土器片を接合復元すると、当時利用されていた器の種類がはっきりしてきました。煮炊きをするための甕、水や酒など液体を貯蔵しておく壺、食べ物を盛る壺・高壺などがあります。煮炊きをするための甕は、表面にススが付いており火にかけられていたことが考えられます。これらの土器は当時の様子を知る上で貴重な資料です。



○器の容量を計算してみました。

甕①：約3.6リットル（高さ23cm） 甕②：約4.8リットル（高さ26cm）

壺：約0.56リットル（小は約0.3リットル） 高壺：約0.5リットル

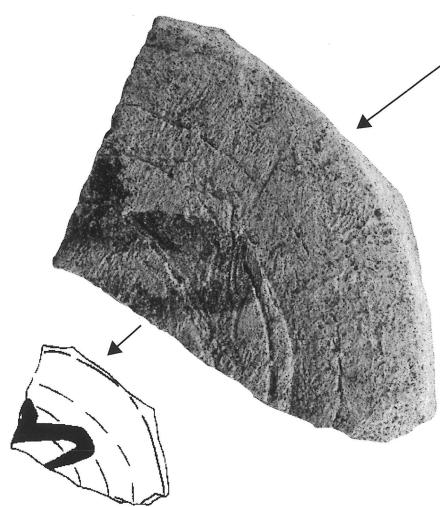
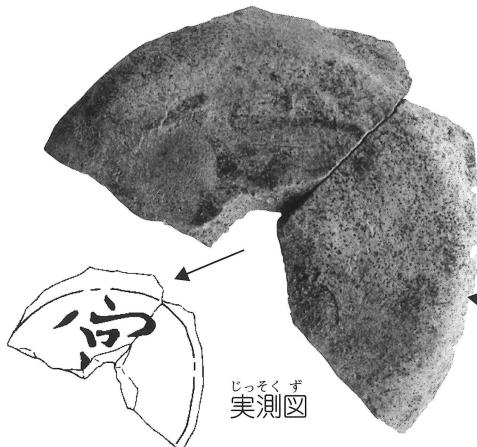
現代との比較：（マグカップ0.2リットル・汁椀0.2リットル・どんぶり0.5リットル）

※出土した土器に水を入れて測ることはできませんので、およその計算値です。

さて、現代使用されているご飯茶碗なんかの容量と比べてみると当時の食卓の様子が理解しやすいのではないでしょうか。壺は現在と同じように一人用の器があつて、高壺などは共同で利用していたかもしれませんね。そして甕では煮込み料理が作られ、水分がしみ込みにくい木製の器（腐食しやすいので出土することはまれです）で味わっていたかもしれません。

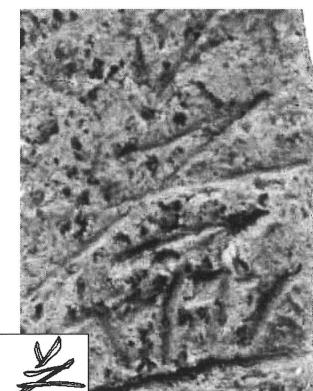
←左の写真のように豊かな食卓だったかもしれませんね。

① 墨で文字を書く（墨書：ぼくしょ）



奈良時代（約1,300年前）には、役所で文字が使用され行政事務が行われていました。国見町内でも墨を使い筆で漢字が書かれている土器が出土しています。紙や木簡は腐敗しやすく、なかなか発見されませんが、まれに遺跡から表面に文字が書かれた土器が出土することがあります。石原遺跡でも「宮」と書かれた土器片（左写真2枚）が出土しています。

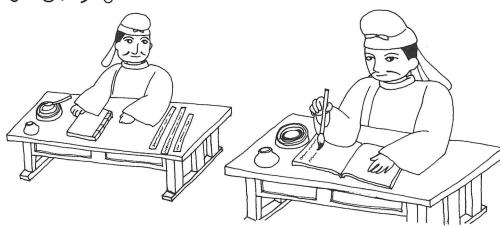
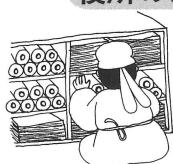
② 文字を刻む（刻書：こくしょ）



いしはら いせきしゅつ ど こくしょ ど き ます
石原遺跡出土刻書土器「益」

同じく文字に関わる出土品ですが、こちらは墨や筆を用いずに、小刀や竹べらなどの先端で文字が刻まれた土器片です。土器を焼成する前に刻まれています。土器の底面外側に刻まれており、墨書土器も底面外側に書かれています。そのため土器を伏せた状態で文字が書かれていることがすぐにわかります。「益」と判読でき、対岸の熊本県にあった「益城郡」などとの関連が指摘されています。

やくしょ 役所のようす



《キーポイント》

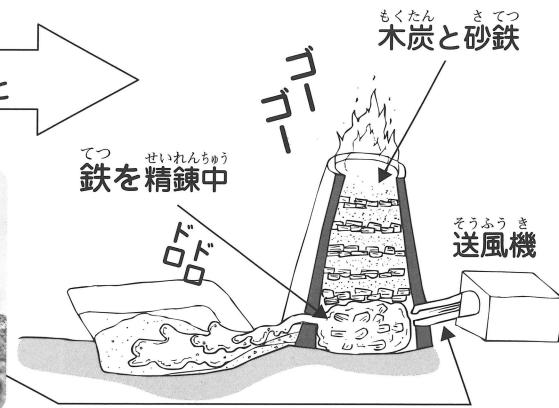
文字は役所などの行政的な場面で主に使用されており、石原遺跡周辺には役所と呼ばれるよう施設があったことが想定できます。島原半島の中心的な役所とも考えられます。

① 鉄をつくる (製鉄: せいてつ)

現在、鉄製品は生活のいろいろな場面で活躍しています。石原遺跡では、中世（約800年前）に鉄をつくって（精錬して）いた炉のあとが発見されました（写真①）。ふいご（送風機）を使って、炉の中で鉄鉱石や砂鉄と木炭を高温で溶かし、鉄を精錬します。そのとき、鉄滓（てっさい：かなくそ）という「かす」が出ます。石原遺跡では鉄滓も大量に出土しています。

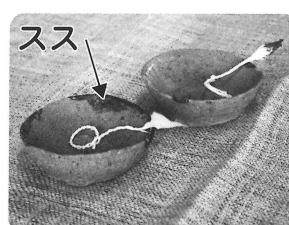


復元すると



② 中世のお墓式

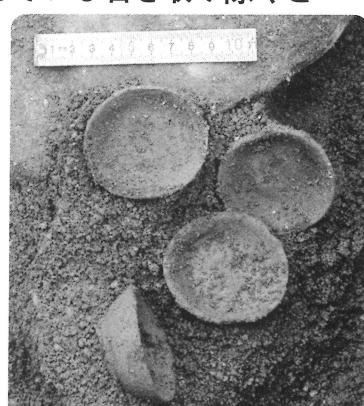
中世（約800年前）のお墓が矢房遺跡で発見されました。深さ50cm、長さ85cm、幅50cmの大きな穴です。大人が手足を伸ばして寝ることができないサイズで、幼児が葬られたのでしょう。供えられた土器（小さな皿6枚）は穴の中に落ち込んで出土しています。お墓の上には人の頭ほどの石がいくつもおかれていたようです。出土した小さな皿には、口の辺りにススが付いており、油（菜種など植物製油）を入れて火をつけ「明かり」として利用していたようです。



とうみょうさら あ
灯明皿の「明かり」



出土した土器は全部で6個



出土した状態

